高校教育におけるまちづくりを題材とした設計実習の試み
ー 山梨県立富士北稜高等学校建築デザイン系列における実践報告 ー
A Practice of Educational Program on Community Development in High School Education
:A Case Study in Department of Architectural Design, Yamanashi Prefectural Fuji Hokuryo High School

菅沼 雄介* ・北村 眞一**
Yusuke SUGANUMA*, Shinichi KITAMURA**

There is growing need for collaboration in order to promote originality within the community. The future of the community is in the hands of the younger generations. Therefore, in high school, it is important to teach the students how to work together with their local community. With this in mind, Fuji Hokuryo High School provides a practice program in community development for the students in architectural design course, which helps the students collaborate with their local community. The purpose of this report is to describe the achievements in the community development through the cooperation between school and local Community.

Keywords: 教育、学社連携、協働、まちづくり、ステークホルダー
Education, Cooperation between School and Local Community, Collaboration ,Community Development,Stakeholder

1. はじめに

近年の社会構造の変革期を迎えて、経済社会のグローバル化が進展するなかで、改めて地域固有の価値が見直されている。地域の特徴を活かした創意工夫によるまちづくりを進める上で、住民、事業者、非営利組織、行政等多様な主体との協働の必要性が益々高まっているとともに、住民サイドから政策の代替案を出せるような知識や技術が求められている。ボトムアップ型まちづくりの基盤となる地域への愛着を高めるためには、イベントや住民参加によるプロジェクトの有用性が明らかにされており(1)、地域の将来を担う人材を育成する学校教育においても、地域住民との協働活動のあり方について学ぶことは重要であると考える。

山梨県立富士北稜高等学校は7系列(2)からなる総合学科高校であり、2004 年の設立以来、「個性の伸長と地域の未来を担う人材の育成」を教育目標として、地域を題材とした教育活動の展開を図ってきた。本稿では、建築デザイン系列における 2008 年度から 2011 年度までの設計実習の報告と、学社連携によるまちづくりへの試みを紹介することを目的とする。

2. 山梨県立富士北稜高等学校建築デザイン系列の概要

山梨県立富士北稜高等学校では、1年次後期から1つの系列を選択し、系列毎に設定された科目の履修により専門的な知識・技術の習得を目指すカリキュラムとなっている。

建築デザイン系列における授業は大きく分けて講義と実習に分かれている。このうち2年次の建築実習(4単位)及び3年次の課題研究(2単位)は講義で学んだことを、具体的な作品づくりを通じて実践的に身につける場として、建築デザイン系列の教育の中核として位置づけられるものである。

建築実習及び課題研究では、CAD実習、木造実習、設計実習の3講座を設定している。生徒はその中から1つを選択し、基礎的技能及び実践力の習得を目指す。以下に、設計実習における取り組みについて紹介する。

3. 設計実習の課題内容と設定の考え方

3-1 実習の目的

本実習では、以下の観点から課題を設定し、生徒の変容と成長を促すことを目的としている。

(1) 現状分析、課題設定、問題解決を図る思考力の養成
(2) 成果をまとめ、情報共有のための表現手法の習得
(3) 協働によるプロジェクト遂行に必要な調整能力の習得

3-2 課題の概要

本実習課題は、大きく2つのパートから構成される。

(1) 建築・デザイン設計競技への参加

大学、専門学校及び各種団体が主催する建築・デザインコンペに取り組み、作品を提出する。原則的に個人課題として、2年次の段階で2つ以上の成果物をまとめる。

(2) 地域と連携したまちづくり活動の実践

富士吉田市域及び学校敷地内を対象として、建築・デザイン活動を通じた働きかけによる地域の価値を高めるプロジェクトを実践する。原則的にグループ課題として、通年で1つ以上のプロジェクトに取り組む。

3-3 実習の進め方

設計実習で実施した課題は以下の通りである。

表-1 設計実習における実施課題

	課題研究(3年次)	建築実習(2年次)	
	まちづくり	設計競技	まちづくり
2008	・地域計画の立案(4名)	開講せず※1	開講せず※1
2009	開講せず※1	・日本工業大学建築設計競技(4名) ・日本大学建築設計競技(3名) ・道都大学住宅設計競技(5名) ・日本工学院八王子専門学校いすデザインコンテスト(12名) ・中央工学校建築コンペ(12名)	・交流空間の整備(12名) ・石窯の制作(12名)
2010	・交流空間の整備(4名)	・東北芸術工科大学全国高校生デザイン選手権(10名) ・日本工学院八王子専門学校高校生けんちくコンペ(10名) ・中央工学校建築コンペ(10名)	・土産品の開発(3名) ・交流空間の整備(10人) ・石窯の運用(10人)
2011	・交流空間の整備(10名) ・土産品の開発(4名)	・日本工学院八王子専門学校高校生けんちくコンペ(5名) ・中央工学校建築コンペ(5名)	・地域イベントの創成(5名) ・石窯の改修・運用(5名)

※1 当該年次の建築デザイン系列者数が少数(12人)であったため開講しなかった。

* 会員外・山梨県立富士北稜高等学校 (Yamanashi Prefectural Fuji Hokuryo High School)
**正会員・山梨大学大学院医学工学総合研究部 (Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi)

4. まちづくり課題の経緯とプロジェクト内容

4-1 まちづくり課題の経緯

設計実習を特徴づけるのは、学校と地域の協働によるまちづくり課題である。実践的なプロジェクトへの取り組みによるまちづくりに対する当事者意識の醸成を意図して、以下に示す課題を設定した。

課題	地域計画立案及び交流空間整備	石窯の製作・運用	土産品の開発	地域イベントの創成
プロジェクト名	「月江寺ルネサンス計画」,「大津蔵」	「石窯づくり」	「お持ち帰り帰り富士山」	「吉田の水祭り」
2008	**基礎調査・計画作成** 4月 現地調査 5月 富士吉田市ヒアリング 8月 先進事例調査(富山市、飛騨高山市) 9月 地域計画案作成 「月江寺ルネサンス計画」として、空店舗を利用した、ボランティアによる ・コミュニティシネマ ・アトリエ空間 ・学童保育空間の整備計画の立案 **提案・周知・啓発** 10月 東都留教育事務所主催 教育フォーラムにて計画案の発表。 11月 富士吉田商工会議所にて 計画案のプレゼンテーション実施。	 写真1 漆喰上塗り		
2009	**事業推進体制の構築** 4月 イベントスペースとなる物件(土蔵)の確保 ・運営主体:大津家酒店 ・整備体制:北稜高校生との実習場所として活用。常駐スタッフによる運用ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの作成。 ・活動資金:山梨県助成金(ふるさと雇用再生特別基金)を利用、2年間で900万円とする。 **施設整備①** 8月 床塗装 9月 柿渋づくり講習会 ・青柿採取・柿渋仕込	**現地視察** 9月 石窯調理体験 ・篠原の里にて(神奈川県相模原市) **敷地計画・躯体設計** 11月-3月 石窯の設計、設置位置の検討 施設管理者との折衝・予算確保 中庭への石窯施工。	 写真2 お守り袋販売所	
2010	**施設整備②** 6月 内装用和紙づくり講習会① (身延町なかとみ和紙の里にて) ・和紙試作 7月 内壁和紙仕上の一部試行 9月 青柿採取・柿渋仕込	**イベントの企画・運営①** 4月 石窯開き ・ｲﾝﾋﾞﾃｰｼｮﾝｶｰﾄﾞの作成・送付 ・演出方法の検討 ・メニューの検討とﾘﾊｰｻﾙの実施 ・70人分の食材を提供する。 **改修作業①** 5月 石窯改修 ・耐熱コンクリート及び漆喰の上塗 **イベントの企画・運営②** 7月 収穫祭の実施 ・30人分の食材を提供	**商品企画立案** 4月-6月 地域の歴史・文化についての学習会 ・富士吉田市歴史民俗博物館にて 御山倶楽部月例会参加 ・メンバー紹介,意見交換。 「吉田の火祭り」にちなんだ土産品の開発に焦点を絞る。 商品を松明の消し炭をいれるお守り袋として、デザイン案を検討する。 **地域からの承認・協働体制の確立** 7月 御山倶楽部から承認を得る。 商品デザインと価格、販売方法を決定 生徒と社会人が役割分担して、 商品を製造することに決定。 神事を取り仕切る、諏訪神社及び北口本宮富士浅間浅間神社より、 商品企画・販売に対する承認を得る。 織物業者から、素材となる甲斐絹の供与を受ける。 **製品販売①** 8月 来訪者に対する休憩所の設営 ・商品販売(500円/個),即日100個完売	 写真3 水ロケット大会
2011	**施設整備③** 4月 内装用和紙づくり講習会② (身延町なかとみ和紙の里にて) ・学校にて和紙の製造開始。 8月 柿渋を塗布した和紙の内壁への貼付② (壁面面積50%まで施工完了) 10月 和紙製造終了 (20cm×20cm×600枚) 11月 柿渋を塗布した和紙の内壁への貼付③ (内壁仕上げ完了) 大津蔵整備過程をまとめた、ドキュメンタリー映像の制作。	**改修作業②** 10月 石窯改修 ・漆喰の上塗り **イベントの企画・運営③** 11月 収穫祭の実施 ・30人分の食材を提供	**デザインの再検討・商品製造** 7月 デザインの再検討 ・サイズの再考による作業性向上 ・ﾊﾟｯｹｰｼﾞの再考による商品価値向上を図る。 商品の製造 ・御山倶楽部と協同で縫製・包装 **製品販売②** 8月 地域ボランティアと協力して販売する。 ・100個完売(500円/個)。	**イベント企画立案** 4-7月 事例調査及び現地調査 ・地域商店主との企画会議 (2回/月程度) 富士北麓地域の自然について学ぶ (大津蔵のイベントにて) 事業計画書の作成 ・資材・スタッフの準備 ・連絡窓口の開設 ・市内小中学校への案内配布 **イベント運営** 8月 第一回「吉田の水祭り」を開催。 ・水ロケット大会 ・水合戦 ・フードコートを運営する。 ・当日参加者数約50人 ・収支決算:▲36,000円

図-1 まちづくり課題の経緯

4-2 プロジェクトの内容

1) 地域計画の立案

本校が立地する富士吉田市は織物業を基幹産業とする郡内地域の中核都市として発展してきた。繊維産業の隆盛とともに昭和30年代から40年代にかけて急激に増加した人口であるが、平成7年の 54,800 人をピークとして現在は減少傾向にあり、中心市街地では「昭和で時間が止まった街」と形容されるような、空き店舗が連なる街並みが広がっている。2008 年における高齢化率は 21.4%、経常収支比率は 91.5%であり、高齢化と財政の硬直化が進行している自治体として位置付けられる。

本プロジェクトでは、生徒の地域に対する関心の喚起と、関係者のボトムアップ型まちづくりにつながるネットワークの形成を目標として、下吉田地区月江寺駅周辺(60ha)を対象として、高校生の視点から、住まい続けたい地域をつくるためのアイデアをまちづくりの指針としてまとめ、行政・商店主へのプレゼンテーションを行うことを課題とした。

2008 年 4 月より現地踏査、先進事例調査及び商店主・行政へのヒアリング、地域の課題の抽出、問題解決案の作成を実施した(3)。また、ヒアリング調査時に取り組みの目的を伝えるとともに、成果発表会への出席を呼びかけた。

成果物を「月江寺ルネサンス計画」として南都留地域教育フォーラム(2008.10)にて発表し、空き店舗を利用したコミュニティシネマ、学童保育スペース、交流アトリエ整備を提案した。

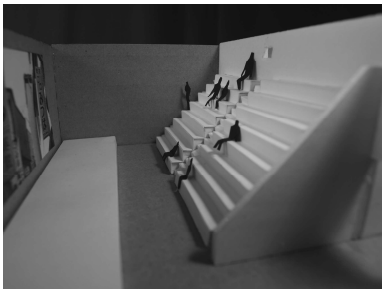

写真 4 コミュニティシネマイメージ

また、市商工会議所において、行政・商店主を対象とした計画のプレゼンテーションを実施した。説明会参加者からは、利害を超えた客観的な立場からの提案として受け入れられ、具現化に向けた検討が行われることになる。以上の取り組みは、各種団体・個人に対して、本校生徒が地域の問題解決にむけたステークホルダーの一員であることを認知・承認される機会となった。

写真 5 商工会議所での説明会

2) 交流空間の整備

「月江寺ルネサンス計画」の発表後、交流アトリエ空間は富士吉田市が事業主体となり、「まちの駅富士吉田」として工芸作品の展示や個人販売スペースの設置等、提案の一部を踏襲した形で具現化された(3)。

コミュニティシネマについては、地元酒店の賛同により、味噌蔵として利用していた土蔵(70 ㎡)を使用できることになった。オーナーとの意見交換により、本プロジェクトの目的を市民に末永く親しまれる場所づくりに設定し、多目的イベントスペースとして土蔵を改修することとした。

当面の間、内装は簡易な仕上げとし、竣工まで2年間の工期を設定して、生徒の習熟度にあわせた漸次的な改修工程と運用プログラムを計画した。市商工振興課の助言により、県ふるさと雇用再生特別基金の導入により整備資金と常勤スタッフ(2名)を確保した。

写真 6 和紙の貼付作業

改修に際しては、セルフビルドによる施工、経年変化を考慮した愛着感が持続する素材の選択を方針とした。素材の選定では、富士北麓地域に多く存在する収穫されずに放置されている柿に着目し、塗料となる柿渋の製造と、青柿の摘果による獣害の防止を図った(5)。

内壁仕上げには手作りの風合いが表現できる和紙を選択し、2 年間で 30 ㎡分の和紙を製作した(6)。

2009 年 10 月に床仕上げとステージ装置据付が完了した段階で、交流空間「大津蔵」としてバイオリン奏者によるこけら落としコンサートを開催した。

写真 7 こけら落としコンサート

その後は月2回のペースで落語や演奏会、映画上映等のイベントを実施しつつ改修作業を進め、2011.11 月には内壁仕上げが完成した。本プロジェクトの結果、開設以来のべ 2000 人が利用する交流空間を整備できた。

表-2 地域計画立案の実施体制

種別	地域計画
名称	月江寺ルネサンス計画
目的	住み続けたいまちをつくるための方策の立案 具現化に向けた学社連携体制の構築
期間	2008/04～2009/03
関係者	①富士吉田市商工振興課 ②富士吉田商工会議所 ③富士吉田市商業連合会 ④富士東部教育事務所 ⑤地域商店主

表-3 交流空間整備の実施体制

種別	空間整備
名称	大津蔵の整備
目的	まちなかへの人が集まる空間の整備
期間	2009/04～2011/03
関係者	①山梨県産業労働部産業政策課 ②富士吉田市商工振興課 ③大津屋酒店 ④NPO法人 獣害対策支援センター ⑤身延町なかとみ和紙の里

3) 石窯の製作・運用

本校福祉健康系列では、学校近傍の遊休農地 2,200 ㎡)を活用し、幼児や高齢者とともに農作物の育成・収穫・調理を通じた交流授業を企画していた。担当教員及び農業指導員との意見交換を通じて、屋外で大人や子どもが一緒に調理・食事が可能な空間の整備を目標として、プロジェクトに取り組むこととし、本校中庭の植栽スペースに交流の拠点となる石窯の設置を計画した。

製作に先立ち、石窯を利用した調理を体験し、交流拠点施設としての要件の検討を行い、施工性と利便性の観点から躯体形状と寸法を決定した[7]。設計図に基づき、資材を調達し、耐火コンクリート、レンガ、コンクリートブロックによる躯体組立、漆喰塗作業を実施した。

石窯開設を記念したオープニングパーティー(2010.4)を吹奏楽部・茶道部と協働して企画し、地域住民・連携プロジェクト関係者・保護者等、40 名を超える来客者をもてなした。以来、定期的なメンテナンスと収穫祭を実施している。

表-4 石窯の製作・運用の実施体制

種別	施設整備・イベント運営
名称	石窯づくりと収穫祭の企画運営
目的	農を通じた交流の拠点となる石窯の製作・運用
期間	2009/09～2011/11
関係者	①山梨県農務事務所 ②富士吉田市農林課 ③富士吉田市農業委員会 ④富士北稜高等学校福祉健康系列

4) 土産品の開発・販売

上吉田地区で生業を営む有志により構成される任意団体である御山倶楽部は、まちの観光資源の掘り起こし、観光商品の開発に取り組んでいた[8]。団体関係者から、高校生の視点から来訪者に向けたサービスを提案できないかという相談があり、商品開発に興味を持った2年次生3人が御山倶楽部の月例会に参加することになった。

協議の結果、富士吉田の特徴を伝える土産品の開発を目標としてプロジェクトに取り組むことにした。地域を特徴付ける資源として、日本三大奇祭である「吉田の火祭り」に着目し、防火の効果があると伝えられる松明の消し炭を保管するためのお守り袋の商品化を企画した。

素材となる甲斐絹は地場織物業者より端切を無償で入手し、生徒により富士山形の部材に切り分けられた。縫製は御山倶楽部を介したボランティアと分担して行い、100 袋を製造した。祭り当日は休憩所及び販売所を開設し、「お持ち帰り富士山」と命名したお守り袋を 1 袋 500 円で販売した[9]。

表-5 土産品の開発・販売

種別	商品企画・開発
名称	お持ち帰り富士山
目的	地域を特徴づけ、価値を高める土産品の開発
期間	2010/04～2010/08, 2011/04～2011/08
関係者	①御山倶楽部(上吉田地区有志団体) ②北口本宮富士浅間神社・諏訪神社

5) 地域イベントの創成

下吉田地区商店街有志は食べ歩きイベントとして「富士吉田まちづくりフェスティバル」[10]を運営していたが、効果が限定的であるという認識から、内容の再構築を検討していた。高校生のまちづくりへの取り組みに興味をもった商店主から呼びかけがあり、商店街の支援を得て高校生が主体となったイベント企画の機会を確保できた。

商店街代表者との企画会議を月 2 回のペースで設定し、目的意識の共有化とアイデア交換を通じて、プロジェクトの目標を、地域の新しい伝統祭祀となるイベントの創成とした。地域産業・生活を支える富士山の水資源の大切さを伝える場となることを意図し、「吉田の水まつり」として主たる対象者を地域の小中学生に設定した事業計画書を作成した。

イベント当日(2011.8)は水を使った遊具制作、水ロケット大会、水合戦、地域食材を実施した。50 名の参加者があったものの、目標集客数に届かず、収支もマイナスであり、継続実施にむけて改善すべき事案が残される結果となった。

表-6 地域イベントの創成

種別	イベント企画・運営
名称	吉田の水祭り
目的	新たな伝統祭祀となるイベントの企画・運営
期間	2010/09～2011/08
関係者	①富士吉田まちづくりﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ実行委員会 (下吉田地区有志団体)

5. 設計実習の評価と課題

5-1 本実習における工夫

課題設定における工夫として、以下が挙げられる。

第一に、生徒と事業者・行政・住民団体との対話機会を創出すべく、地域との協働体制の確立に配慮した。2008 年より以前において、地域を題材とする教育は殆どなされていなかったものの、一方で、活力を失いつつある地域について危機感を持つ団体、個人が存在し、それぞれが活動を展開していた[11]。まちづくり課題の導入に際して、まず、教員個人による各種団体活動への参加や情報収集を実施し、地域のカウンターパートとなる人材・団体の見極めを図った。その結果、商店主や市議会議員、行政職員、PTA 役員等、地域連携の推進にあたってのキーパーソンとの信頼関係を構築できた。地域を題材とした教育活動に対する理解を得て、ステークホルダーとの実習課題に対する事前相談の円滑化、効課的な協働体制を確立することができた。

第二に、生徒の主体性を高めるような指導助言に留意した。設計競技課題の選定にあたって、教員との相談を実施したうえで、生徒の選択による目標設定を行った。また、成果物をまとめる過程を重視して、集団討議や様々な素材を利用した試作、現地調査を実施するとともに[12]、定期的にプロジェクトが完成するまでに必要な工程を生徒と教員が共同で確認し、作業内容・進度を自己管理するための基準を設定した。その結果、メンバー間で意見交換を行いながら、自律的な作業を実施できた。

5-2 本実習に対する評価

本実習では、終了後に生徒に対して、実習内容及び成果についてアンケート調査を行っている。その結果、以下の観点から有益であったとの評価を得た。

(1)問題解決志向の伸長

設計競技及び各プロジェクトの遂行にあたって、課題の抽出が困難であったという回答が最も多く、現状把握と複数の視点から問題解決策を考察する重要性を実感させることができた。また、アイデアを共有、伝達するために有効な表現方法を試行錯誤しながら開発することができた(13)。

(2)自己効力感の醸成

設計競技作品の入選(14)や、空間整備、地域イベント企画運営に対する地域・社会からの認証を通じて、自らを社会に貢献できる能力をもった個人として認識することができた。特に、まちづくり課題では、地域関係者と対等な立場での意見交換・活動展開により、一人ひとりの行動が地域環境を改変させる可能性を持っていることを実感させることができた(15)。

(3)地域に対する愛着感の醸成

まちづくり課題に取り組む以前は、地域に対して関心が低く、そこに住む人や空間の存在を認識していない生徒が大半であったが、プロジェクトへの参加を通じて、地域を自らの生活環境として捉え直すことで、まちづくりの当事者としての意識を持たせることができた(16)。

5-3 実習課題の問題点

実践を通して、持続的な設計実習の実施について、以下に示す問題が明らかになった。

第一に、活動時間確保の難しさである。授業時間だけでは十分な成果を挙げることが困難であるとともに、単学年による単発的なプロジェクトでは、スタートアップに費やす時間が大きく、ステークホルダーとの信頼関係及び課題に対する認識が深化しない。従って、持続可能な活動を展開するために、複式クラスによる授業実施等による、異なる年次間での知識技術の伝達、目的の共有化を促進するカリキュラム編成の導入が必要である。また、習熟度に合わせた漸進的な活動を担保する工程計画の立案が重要である。

第二に、活動空間確保の難しさである。学校近傍において、多くの遊休空地や空き店舗は存在するものの、学校教育の場として活用可能な場所は限定的であり、個人的なコネクションに依拠しているのが現状である。従って、学校と地域が協働可能なプロジェクトの可視化を図るために、平時から定期的に地域のステークホルダーと学校側担当者との情報交換を通じた,物件・案件リストの構築が求められる。

第三に、目標設定の難しさである。地域には学社連携の素材が複数存在している。一方で、事業に対する関与期間や推進体制のあり方は案件によって異なり、地域側と学校側の目標と条件に関する合意形成が協働活動の成否を分ける。プロジェクトを単なる業務の請負ではなく、学校と地域の双方にとって有意義なものとするためには、教育活動及び地域空間を社会的な共通資本として守り、育てる視座に立った取り組みが求められる。

6. おわりに

本校の建築デザイン系列では、コモンセンスに基づいて、自律的に行動できるまちづくりの担い手を育成すべく試行錯誤を重ねている。本実習について、教育・研究・実務に携わる様々な立場の方々よりご意見を賜りたい。

補注

(1)地域と愛着との関係を論じたものとしては、引地(2009)(文献補注1))や鈴木(2008)(同2))などがある。

(2)教養,福祉健康,ビジネス,情報,電気情報,機械テクノロジー,建築デザイン系列の7系列から構成されている。

(3)「月江寺ルネサンス計画」策定に際して、富山市(株式会社まちづくりとやま)，飛騨高山市担当者によるレクチャー及び現地見学を実施した。

(4)「まちの駅富士吉田」は山梨県ふるさと雇用再生特別基金事業により、「下吉田街なか拠点事業」として空店舗の改装を実施、地場物産販売・情報提供を行う施設として2009 年 5 月より開設している。

(5)柿渋の製造に際しては、NPO 法人獣害対策支援センター担当者のレクチャーを受け、1年間熟成させた後に使用した。

(6)石窯の調理体験は神奈川県相模原市「篠原の里」にて実施した(2009.9)。躯体形状は上下2段式とし、炉内温度は 350℃を保するとともにコンパクトな寸法(W:820mm H:1700mm D:780mm)とした。

(7)和紙の製造に際して、身延町なかとみ和紙の里の技術員によるレクチャーを受け、和紙を製造できる環境を実習室に設置した。

(8) 2007 年に市が実施した「観光まちづくりコンサルティング事業」にあわせて、観光資源の発掘、観光商品開発を行うために集まった市民である。商店主、旅館経営者、食品店経営者、ギャラリー経営者、歴史研究者等から構成される。

(9) 2010 年、2011 年ともに完売し、利益は次年度活動資金として留保することとした。

(10) 2000 年から開始され、商店街と連携した食事クーポンにより周遊しながらコース料理を提供する企画であり、500 人規模の集客があった。

(11)「まちがミュージアム」,ギャラリー・ナノリウム(1999-2009)中心市街地空店舗を利用したインスタレーション。「どんど焼きナイトフィーバー」,本町大好きおかみさん会による路地空間を利用したイベントなどがある。

(12) 建築物見学は、六本木赤坂周辺、丸の内・大手町周辺、吉祥寺駅周辺、下北沢駅周辺、原宿青山周辺等で実施した。

(13)生徒アンケートより、「イメージを形にして、他人に伝えることの難しさに気づいた。」,「多面的に物事を捉えること、視野を広げること、説明する力をもっとつけたい。」,「エスキスで時間を使いすぎ、図面・模型・着彩・レイアウトの時間が不十分であった」等の回答があった。

(14)主な設計競技入選実績では、東北芸術工科大学主催高校生デザイン選手権大会入選(2008), 日本工業大学主催建築設計競技最優秀賞(2009), 日本工学院八王子専門学校主催高校生けんちくコンペ金賞・銀賞・銅賞・審査員特別賞(2010,2011), 中央工学校建築系高校生対象コンペ佳作(2009,2010)等がある。

(15)生徒アンケートより、「商店街の方々が高校生の意見に真摯に向き合ってくれた。」,「自分が手がけた建物が利用されていて誇らしい」,「プロジェクトが完成したときの達成感は忘れられない。」,「私たちの企画を通じて、参加者の笑顔を見ることができてよかった。」等の回答があった。

(16)生徒アンケートより、「月江寺周辺に関心が湧き、毎日商店街を通るようにしている」,「近所の親戚にプロジェクトを宣伝した。もっと活動を広げたい。」,「地域の方々の熱意を感じて商店街を見る目が変わった、私ができることを探したい。」等の回答があった。

参考文献

1)引地博之・青木俊明・大渕憲一(2009)「地域に対する愛着の形成機構:物的環境と社会的環境の影響」,「土木学会論文集」D,Vol.65 no2,pp.101-110.

2)鈴木春菜・藤井聡(2008)「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」,「土木計画学会研究・論文集」Vol.25,no2,pp357-362.

3)片山健介・円山琢也・菅正史・野澤千絵・大西隆・城所哲夫・大森宣暁・原田昇・小泉秀樹(2005)「大学学部教育における広域計画演習の試み:東京大学都市工学科における実践報告」「都市計画報告集」no4,pp.71-76,日本都市計画学会

4)倉知徹・齊木崇人・鎌田誠史(2009)「新郊外居住の宅地開発プロジェクトを先導する大学研究室の役割と継続的推進体制:神戸芸術工科大学による舞多聞みついけプロジェクトを事例として」「都市計画報告集」no8,pp.27-30,日本都市計画学会